

雨あがり

勘違い

入学式直後の教室でA君は後の席の生徒に話しかけました。明日の予定についての連絡で、聞きもらしたことを教えてもらおうと思ったからです。しかし話しかけても、後の席の生徒はじつと顔を見つめるだけでした。このときA君は無視されていると感じました。その翌日からA君は登校できなくなりました。むかし、私が出会った高校生の例です。

A君は親に連れられて、最初はイヤイヤながら相談室登校をしていましたが、しだいに来室を楽しみにするようになりました。私との間に安心感が生まれたからです。二ヶ月ほどたったころでしようか、私はいま述べた入学式直後のショッキングな体験をはじめてA君から聞きました。それで担任の協力を得てA君の後の席が誰であったかを調べたのです。調べてみて驚きました。その生徒（B君）は、学校ではまったく話せない子、つまりA君以上に人間関係が苦手な緊張している子だったのです。

もしA君が、小・中学校時代にクラスの間人間関係に安心感を味わっていたら、こんな勘違いから不登校に陥ることはなかったはずです。A君はやさしい心の持ち主で感受性豊かな子でしたが、厳しいお父さんのもとでビクビクして育ちました。中学生になってもお父さんのような厳しい先生は苦手で、友だちが叱られていても自分が叱られているように思い傷つきました。そして人におびえる自分が大嫌いな若者になっていました。

自分が嫌い、そういう自分を受け容れられない苦しみを、「自己受容できない苦しみ」と表現します。A君は自己受容できず苦しんでいる。だからB君から返事が返ってこないだけで深く傷ついたので。勘違いのもと、それは自信のない自分自身の、人間関係におびえる心そのものだったのです。

すべての人が持つ自己受容の苦しみ

「障害者」という言葉がありますが、もし、欠点を障害とよぶならば、欠点がない人間などこの世にはいませんから、すべての人間が障害者ということになります。そして人間は、そういう欠点（障害）を持っている自分を受け容れられず苦しむわけです。

私自身も、長い間欠点だらけの自分が好きになれず苦しみ続けてきました。しかし今は、そういう苦しみに出会ったからこそ、欠点に苦しむ人の話に少しは寄り添うことができるのです。

いつか私のカウンセリングの師匠が、「自分の一番イヤなところを思い浮かべてごらん。…そればきつと、いつか、あなたの宝物になるよ!」と教えてくれたのを思い出します。私は師匠のその教えを聞き、心から「本当にそうだ」とうなずきました。私にとつて、自分の最もイヤなところは、その言葉どおりすでに宝物になっていたので。人生とはつくづく不思議なものだと思います。

雨あがり

人間は強そうに見えてもあんがい弱いものです。順調に生きているときは立派で強そうに見えますが、大きな苦しみに出会おうと、その苦しみに堂々と向き合えないため、親や他人を悪者にして非難したり、この世に生まれしてきたことさえ恨んだりするものです。

大きな障害を持って生まれたある若者は、「なぜボクがこんな目に遭わなければいけないの!」「こんなボクをなぜ生んだのか、生まれてこなければよかった!」と、親を責め続けたと言います。そして「この障害さえなければ友だちだつてできるのに」という気持ちをいつも持ち続けていました。でも気がついたのです。そう思つて、障害（欠点）を理由に心を閉ざして生きてきたのは他の誰でもなく自分自身であったことに…。

そして、その気づきは彼の欠点を宝に変えていきました。私はその話をまるで雨あがりの青空を展望する思いで聞かせてもらったものです。

二〇〇八年七月

